

資料紹介

初期の国際年賀状

—各国のデザインとその背景 1888-1926—

井村 恵美

① はじめに

郵政博物館の約197万点の収蔵資料群のうち、大分類のみで詳細な分類が終了していない資料がまだ多く存在している。その中から2016年に新たに調査を開始したのが「国際年賀状（外国年賀状）」のコレクションである。これらの年賀状は、万国郵便連合（UPU）^①に加盟する各国の郵政庁等の間で交換されてきたもので、一枚のカードに表されたデザインから各国の通信事業などを知ることのできる興味深い資料である。

このコレクションは、明治1888（明治21）年（図1）からおおよそ5,000点が収蔵されているが、このほど明治から大正時代に受け取った1,558件のデータ化が終了したので報告するとともに、新たに判明した内容を含めて資料の紹介を行っていくこととした。

今回の分類作業に当たっては、「国際年賀状」の定義付けが難しく、本資料について比較事例がほとんどないことから新設した凡例に基づいて整理を行うこととした。

また、各資料の文字情報は当時の万国郵便連合の基準言語であるフランス語を軸としながらも、多言語の解説が必要となった。そこで解説とデータベース化には、外国の郵便通信史に詳しい星名定雄氏^②に携わっていただいた。星名氏の的確なアドバイスや多大なる協力を得て今回の分類作業とデータ化が実現したもので、ここに厚く御礼申し上げたい。



図1 1888年 コロンビアの年賀状

- ① 1874年にスイスのベルンに設立された郵便に関する国際機関。Union Postale Universelle（英：Universal Postal Union）
- ② 交通史研究会編集委員、郵便史研究会副会長。著書に『郵便の文化史－イギリスを中心として』（みすず書房、1982年）『郵便と切手の社会史－ペニー・ブラック物語』（法政大学出版局、1990年）『情報と通信の文化史』（同、2006年）『イギリス郵便史文献散策』（郵研社、2012年）ほか

【凡例】

資料の再整理にあたっては、原則当館の分類項目に則りながら、資料記載事項から読み取れる情報を考慮し、次のような凡例によりデータ化した。

- 1 発出地の国名は、原則現在の呼称に統一した。植民地などは備考欄に明記した。
- 2 発出者は、現地標記に加え国や組織によりさまざまな表記があるため、仮訳として郵便（郵政）は「郵政庁」郵便・電信（電話）は「郵電（電）庁」という標記を新たに定めた。例：Le Directeur Général des Postes, des Télégraphes et des Téléphones = 郵便電信電話庁（郵便電庁）長官（PTT長官）。
- 3 発出年は、日本が受理した年を記載した。
- 4 図案の標記は、「記章」「賀詞」のほか特徴的なものは別途記載した。
- 5 備考には、封筒の有無やその他特殊事項を記載した。

② 発出国の情報について

(1) 件数

現時点の整理終了合計数は1,556件に上るが、年別に見て通数が増えるのは、1899（明治33）年からである（表1）。通数の増減理由は定かではない。

最初期の受取例としては、郵便発祥の地のイギリスなどの主要国はわずかで、北欧や南米が多くみられる（表2）。国地域別の内訳（表3）をみるとヨーロッパが39件で最も多く、発信者の大半が各国の郵政庁とその機関によるもので104件である。郵政庁以外には国際機関として万国郵便連合があるほか、電信電話に関する商業通信会社からの年賀状があり、大北電信会社⁽³⁾やアメリカ電話電信会社（American Telephone and Telegraph Company）が代表例である。

年	通数	年	通数	年	通数
1888（明治21）	1	1901（明治34）	58	1914（大正3）	67
1889（明治22）	2	1902（明治35）	63	1915（大正4）	18
1890（明治23）	0	1903（明治36）	50	1916（大正5）	46
1891（明治24）	3	1904（明治37）	40	1917（大正6）	48
1892（明治25）	10	1905（明治38）	67	1918（大正7）	59
1893（明治26）	26	1906（明治39）	58	1919（大正8）	55
1894（明治27）	0	1907（明治40）	41	1920（大正9）	42
1895（明治28）	0	1908（明治41）	7	1921（大正10）	40
1896（明治29）	0	1909（明治42）	71	1922（大正11）	40
1897（明治30）	2	1910（明治43）	88	1923（大正12）	71
1898（明治31）	1	1911（明治44）	71	1924（大正13）	60
1899（明治32）	40	1912（明治45）	66	1925（大正14）	88
1900（明治33）	47	1913（大正2）	20	1926（大正15）	92
				1,558	

表1 国際年賀状受取通数（年別）

3 長崎まで海底ケーブルを敷設し、1871（明治4）年から日本の国際電信事業を開始。大北電信株式会社編『大北電信株式会社百年略史』（国際電信電話株式会社、1972年）p. 17.

年	国・地域名／機関名
1888（明治21）	コロンビア
1889（明治22）	ポルトガル
	ドイツ
1890（明治23）	—
1891（明治24）	ブルガリア
	デンマーク
1892（明治25）	エクアドル
	ノルウェー
	フィンランド
	モンテネグロ
	サルヴァドル
1893（明治26）	ペルー
	ルーマニア
	セルビア
	ウルグアイ
	グアヤキル
	アメリカ
	スペイン
	コーチシナ（ベトナム）
	ロシア
	メキシコ
	万国郵便連合（UPU）
	ルクセンブルグ
	コスタリカ
	ホンジュラス
	ボリヴィア
	オーストラリア

表2 国際年賀状（最初期受取例）

(2) 受取状況

これらを総合し、明治から大正時代にわたって39年間で日本がどの国から多く年賀状を受け取っているかをリスト化した（表4）。回数、枚数ともにデンマークが最多で1891（明治24）年から1926（大正15）年までの間に29回受け取っている。

(3) 発出先

国際年賀状の大半は省庁が国を代表して送付しているが、データ化して見えてきたのは一国一通というわけではなく、国によっては複数枚送付されている場合があるということである。最たる例はドイツで、受取枚数の累計を回数で割ると1年あたりの平均数は3枚と多い。ドイツの場合は、郵便電信局や鉄道郵便局等から同年に複数枚を差し出しているため、発出先の

国地域・会社・機関	国数等
ヨーロッパ	39
アジア	18
アフリカ	16
南アメリカ	14
中央アメリカ	12
オセアニア	3
北アメリカ	2
小計	104
商業会社	12
国際機関	2
不明	2
小計	16
合計	120

表3 外国年賀状（国地域・会社等別）

国名	回数	枚数	枚数／回数
デンマーク	29	58	2.0
ノルウェー	26	40	1.5
インド	25	49	2.0
メキシコ	24	39	1.6
ベルギー	24	40	1.7
ドイツ	23	68	3.0
スウェーデン	23	40	1.7
ルーマニア	22	31	1.4
ポルトガル	21	33	1.6
コーチシナ（ベトナム）	21	27	1.3
ブラジル	21	30	1.4
ギリシャ	21	25	1.2
エクアドル	20	23	1.2
スペイン	20	23	1.2
イタリア	20	21	1.1
チリ	20	24	1.2
スイス	20	28	1.4
アルゼンチン	20	23	1.2
オランダ	19	36	1.9
中国	19	44	2.3

表4 国際年賀状（回数・枚数）



図2 1899年 帝国ケルン上級郵便管理局



図3 1905年 ライプチヒ鉄道乗務員

例を挙げると、ベルリン帝国郵便局、ベルリン電信局、バイエルン郵電局、帝国ケルン上級郵便管理局（図2）、ライプチヒ鉄道乗務員（図3）、オーバーハウゼン地区鉄道乗務員、エムデン電信局、フランクフルト郵便局、ブレーメン上級郵便管理局などがある。

3 文字情報

(1) 宛先について 江戸「Yedo」と東京「Tokio」

最初期には江戸宛に到着となっている年賀状例がある。図4のグアヤキルは「Yedo (Japon)」、図5のコスタリカは「Yedo」という標記で記されている。多くの国々は、図6のオーストラリアのように東京「Tokio」または「Japon (Japan)」宛で差し出されている。19世紀末、日本という国がどのように認識されていたかがわかる事例として興味深い。これら国際年賀状は封書で差し出されることが多く、カードそのものには宛先が明記されている例が少ないため、どのような宛先で差し出されたかを体系的に知ることができない。収集当時にカバー（封筒）が保管されなかったことは残念である。カバーが残っている例としては、現時点調査までに数件ほど判明しているが、押印された日付印（消印）からは、日本までの輸送経路を知る手がかりがあり、通信・運輸の状況を知るものとしても貴重である。



図4 1893年 グアヤキル郵電庁長官（江戸宛）



図5 1900年 コスタリカ郵政庁（江戸宛）



図6 1899年 メルボルン郵便局電信部（東京宛）

(2) クリスマスカードとニューイヤーカード

はがき（カード）は、1869年にオーストリア＝ハンガリー帝国の郵便局で販売が始まり、手軽にメッセージを送ることができるツールとして瞬く間に世界各国でカード文化が花開くようになる。今日、欧米では年末年始のあいさつ状は専らクリスマスカードが主流だが、かつては日本と同じく年賀状（ニューイヤーカード）も差し出されていたようである。

今回取り上げている国際年賀状は、その名の通り基本的には賀詞を記した「年賀状」だが、なかにはクリスマスと賀詞を併記する例がある。こちらは少数派でインドの例（図7）が上げられる。



図7 1899年 インド郵政庁長官（クリスマス・賀詞併用例）

④ 年賀状のデザイン

これまで紹介した年賀状例にあるようにそのデザインはさまざまだが、初期においては賀詞のほか、神話的図像などを施した華麗なデザインが多い。例外はあるが、大きくは以下の6つに分類することができる。それぞれに対応する図版を用いて事例を紹介する。

【事例】

(1) 賀詞と徽章を配したもの

徽章には国や省庁の文様のほか、郵便事業を表す徽章も多く用いられている（図8）。これはヨーロッパの王室のある国に多い郵便徽章で「王国＝王冠」「ホルン＝郵便」を示している。



図8 1907年 スウェーデンの郵便徽章

(2) 郵便事業をあらわしたもの

図9は、デンマークのコペンハーゲンのような。郵便馬車と郵便外務員らを描いたものである。左手のレンガ建ての建築物はコペンハーゲン中央郵便局。図像がある場合は、このように通信事業に関する要素が一枚に収められている例が多い。



図9 1891年 郵便馬車と中央郵便局（デンマーク）

(3) 電信電話、通信事業をあらわしたもの

背景に電線を表現した事例は多い。なかでも図10は工夫を凝らしており、電線に止まる小鳥で新年のあいさつの文言であるProsit Neujahr（新しい年に乾杯）を表現している。



図10 1905年 電線を表した例（ドイツ）

(2) (3) の要素を神話的図像で表現した例

図11、12は全能神ゼウスとそのアトリビュートである「雷」で電気通信事業を表している。この雷の表現は、フランスなどヨーロッパの多くの郵便庁電信電話部門の徽章となっており、当館収蔵の外国制服や制帽のデザインに同様の事例がある。



図11 1901年 ゼウスと雷（ドイツ）



図12 1903年 雷と電話機（ホンジュラス）

図13、14は通信の象徴とされるヘルメスとそのアトリビュートである「ケリュケイオン（双翼と蛇の杖）」により、通信事業のイメージを図像化している。



図13 1901年 ヘルメス切手（ギリシャ）



図14 1904年 ケリュケイオンと電信局（ドイツ）

(2) (3) の要素を組み合わせた例

郵便関連の図像を主題として描くスタイルが主流で、背景に電線を配して通信事業全般を巧みに表現している。図15は雪の夜の鉄道による郵便輸送。図16では後方の電線の前に立つ馬上の通信使（郵便配達員）を描いている。いずれもドイツの事例だが、同国のデザインは印刷技術も高品質で、通信事業を描きながらも作品としての完成度の高い華麗なデザインが多いのが特徴的である。

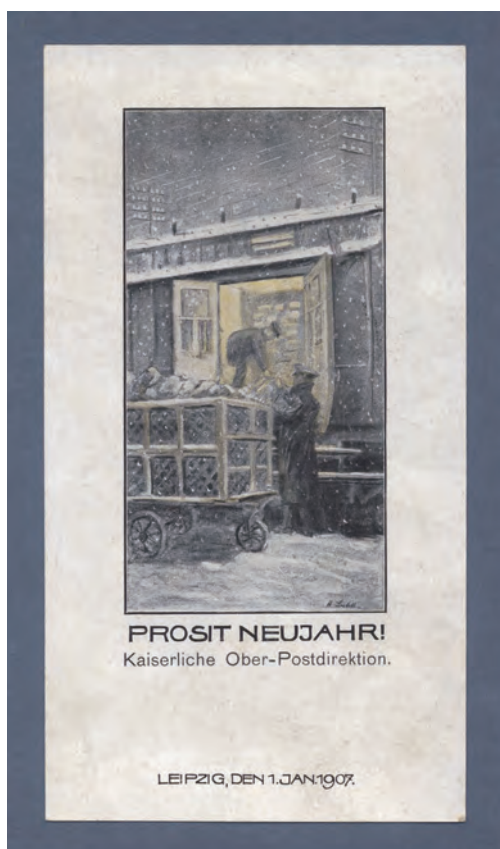


図15 1907年 鉄道郵便と電線（ドイツ）



図16 1909年 郵便と電線（ドイツ）

(4) 庁舎、局舎などの建物をあらわしたもの

郵便・電信局のほか、威厳を象徴する庁舎を主題として表現している例もある（図17）。



図17 1905年 ベルン郵政庁舎（スイス）

(5) 発出国の景勝地などその国のイメージを伝えるもの

通信事業のモチーフではなく、写真や風景画を用いた年賀状デザインの例（図18）。



図18 1901年 ルクセンブルグの街並み

(6) その他

外国の年賀状の中には、日本的なエッセンスがある例もみられる。図19はフランスの事例だが、1900年開催の第5回パリ万博の影響があるのか、桜を用いた日本的モチーフの年賀状である。図20の万国郵便連合の年賀状には、連合のシンボルマークと同様に各国の女性像に加え日本女性が表現されている。

19世紀末から20世紀初頭の国際年賀状で特徴的なのは、電信電話を象徴するデザインである。現在では描くのを避けてしまいがちな電線、碍子、電柱などを積極的に描く。これは最先端のシステムを導入している様を見せつけるような図柄とも言えるだろう。このごく小さな紙片の中には、美しさともに新時代の幕開けを象徴する最先端の動力や電気電信のパワーを体現するようなデザインにあふれている。



図19 1902年 フランス郵電庁の年賀状



図20 1902年 万国郵便連合からの年賀状（スイス）

5 今後の検証

当館の初期の収蔵資料の多くは通信省の各部署から移管された物品類で形成されているが、この国際年賀状については受入れの経緯が判明していない。

日本が万国郵便連合に加盟したのは、1977（明治10）年である。各国郵政庁との直接交換が始まった同時期の年賀状が存在していてもおかしくないが、当館のコレクションとしては1888（明治21）年の年賀状が最初で、それ以前の資料は存在していない。その頃の資料がない理由の一つとしては、1887（明治20）年の通信省の組織改正⁽⁴⁾が考えられ、この新体制下以降の資料が当館にあるとも思えるが、推察の域を出ない。

ちなみに博物館としての資料収集は、1892（明治25）年から当館の前身である郵務局経理課物品掛により行われ、さまざまな収集を積極的に行っていたようである⁽⁵⁾。外国の物品に関しては、1897（明治30）年以降に外国郵便課で保管していた万国郵便連合交付の外国切手の移管が開始されたことから、国際年賀状もその頃から物品掛に移管されていたと考えられる⁽⁶⁾。収蔵経緯については、当時の資料目録や文書類をあたり、別途調査を進めたいところである。

そのほか前述の統計にあるように毎年交換される年賀状が、国地域や年によりばらつきがあ

4 3月10日組織改正。通信省に大臣官房と総務・会計・内信・外信・工務・為替貯金・燈台・管船の各局を置く（郵政省編『郵政百年史』（通信協会、1971年）p. 123.）

5 井上卓朗「郵政資料館所蔵資料概要」（郵政資料館『郵政資料館 研究紀要』創刊号、2010年、p. 98.）

6 通信博物館編集『通信博物館75年史』（信友社、1977年）pp. 11-15.

る点も気になるところである。単純な増減があるわけではなく極端に少ない年があるほか、北欧や南米の量に比べて欧州主要国が少ないなどの差についても収蔵経緯などを調査し明らかにしていきたい。

最後に日本の事例を紹介する。1903（明治36）年に日本が差し出した国際年賀状の原画で、博物館主任の樋畑雪湖が担当した⁷⁾。近代化の象徴といえる「通信」と伝統的な日本の「風土」を対比させるデザインを用いている。桜舞う春風の中、自転車で郵便を配達する外務員の姿である。



図21 1903年 通信省の国際年賀状（原画）

（いむら えみ 郵政博物館 主席学芸員）

7 井上卓朗「郵政資料館所蔵資料概要」（郵政資料館『郵政資料館 研究紀要』創刊号、2010年、p. 97）